

統語論・意味論・形態論の研究

中島平三

少し記憶から薄れかけているが、2014年から15年にかけて世間を騒がせた理化学研究所のいわゆる「STAP細胞事件」は、我々人文科学の分野にも少なからぬ衝撃を与えた。データ捏造や論文剽窃については、身近な学会誌への投稿においても疑念が持たれることがある。同事件は、研究者一人一人の研究の取り組み方や論文作成の在り方に、深刻な警鐘を鳴らしているとも受け取れる。その意味で、本欄とは直接関係ないが、須田桃子『捏造の科学者 STAP細胞事件』(文藝春秋)は、事件の真相の一端を知り、襟を正す上で一読に値する。

マサチューセッツ大学(アマースト校)名誉教授の Emmon Bach が2014年11月28日に逝去、享年85。主著として、*An Introduction to Transformational Grammars* (1964)、*Syntactic Theory* (1974)があり、どちらも初期生成文法の普及・啓蒙に大きく貢献した。統語論・意味論・音韻論の他にカナダのプリティッシュ・コロンビア州北部の原住民の言語(特に Haisla 語)の研究に従事し、アメリカ原住民言語研究協会(The Society for the Study of Indigenous Languages of Americas)の会長を務めていた。熊本生まれで大変な日本最員であり、UMass を退職後も同大学に研究室を持ち、2001年に訪問した時には温かく迎え入れてくれた。言語学者で SF 小説家の Suzetter H. Elgin が2015年1月27日に享年78で逝去。我が国では *What is linguistics?* (1973) や *A Guide to Transformational Grammar* (John Grinder と共著、1973) などの入門書およびその翻訳書でよく知られている。

国内では、名古屋大学名誉教授で、学校法人岐阜済美学院長などを歴任された小野経男氏が2014年7月6日に逝去、82歳。主著に『意外性の英文法 学生の質問の意外性に備える』(大修館書店、1987)、『現代の英文法9助動詞』(荒木一雄、中野弘三と共著、研究社出版、1977)などがある。冥福をお祈りする。以下本文中、敬称略。

この1年は、学界の重鎮たちの健筆が際立った。まず単著の研究書を中心に見ていく。

長谷川欣佑『言語理論の経験的基盤』(開拓社)は、どんなに言語理論が進もうとも言語事実を正確に記述する経験的基盤が大切であることを力強く説く。生成文法が認知科学に傾くにつれ、言語事実の記述や分析が疎かにされてきているという懸念を耳にする。それに対して、「プログラム」は理論とは異なり、仮説の成否よりも、発想の

豊かさや発展可能性の追求を重んじているのだという反応が予想されるが、言語研究が経験科学である限りは経験的事実を疎かにするわけにはいかない。本書は、そのような思いから最新生成文法理論を批判的に吟味している。長谷川は、最近のミニマリスト・プログラムの基本的な仮定群——2項枝分かれ構造、線的順序の否定、句構造規則の否定、コピー理論、潜在的移動など——を1つずつ批判的に検討し、その不備や問題点を、英語の繰上げ、コントロール、小節、与格および二重目的語構文、優位性条件などの経験的事実に基づいて明らかにしていく。その快刀乱麻ぶりは切れ味鋭く、小気味よい。例えば、基本的仮定群の多くが関わる二重目的語構文では、2項枝分かれ構造の帰結として2つの目的語 (IO と DO) が1つの構成素を成すという分析を受け入れざるを得ないが、その不適切さを受動化や分裂文など多くの事実に基づいて批判し、代わりに穏当な3項枝分かれの構造 (V-IO-DO) を主張する。この構造は、英語の句構造規則として独立的に認められるものであり、一見 IO と DO の間の階層的相違の根拠とされる事実は、著者が1974年に発表した「一般 A-over-A 原則」に線的順序を組み入れて改定することにより説明可能になるとしている。事実の記述を強調する余りに ad hoc な記述に陥るということがよくあるが、本書では、統語論の自律性、構造保持の原則、統語論の一般原則など、統語論の重要な原則がぶれることなく貫かれている。

今井邦彦『言語理論としての語用論——入門から総論まで』(開拓社言語・文化選書)は、軽妙な筆致で議論を進めながらも、語用論の研究を通じて「言語理論はどうかあるべきか」「言語研究は何を目指して行われるべきか」という深淵なテーマに向き合っているように受け取れる。語用論、関連性理論を概説した第1章では、発話解釈がどのような過程(語用論過程)を経て行われ、それらの過程がどのような原理(関連性原理)に基づいているかという語用論理論の中心的課題が、絶妙な例と共に大変整理された形で展開されている。他の語用論理論を批判的に検討した第2、3章では、言語行為理論、グライス理論、新グライス理論が取り上げられ、特に認知言語学には1つの章を設けて、著者の表現を用いれば「harshとも言うべき言辞を連ねて」鋭く切り込んでいる。認知言語学者・フォコニエは、言語研究の意義や目的として「言語とは精神・頭脳の中を知るための覗き窓」という設定をしているが、関連性理論の研究の中からは、発話解釈は自動的・無意識的に行われること、人間はそのように進化したこと、発話解釈能力は独立したモジュールの1つであること、モジュールには生得的なものとしてそれから派生するものがあることなどが明らかにされてきた。ではひるがえって、認知言語学の研究からは、それらに類する発見や功績があったかどうかと問いかける。著者の答えは極めて厳しいものである。こうした問いは、認知言語学に留まらずどのような理論に対しても、また理論的研究に関わるすべての研究者に対して、突き付けられているように思われる。周到に構成されていて読み易いが、重要な問題

を含んだ深みのある渾身の1冊(著者はこうした表現を好まないかもしれないが)である。

秋元実治『増補 文法化とイディオム化』(ひつじ書房)は、定評のある『文法化とイディオム化』(2002年)に新たに2つの章を増補した改訂版。増補した1つの章は、call afterのような前置句動詞のafterが、その「運動・追求」の意味が薄れるのに伴って、15世紀頃からforに取って代われ、またissue forthのような句動詞のforthが時代と共にoutに取って代われ、forthを含む句動詞が衰退していく様子を、Helsinkiコーパスなどを用いて丁寧に調べている。もう1つの増補章は、意味的競合関係にある4つのverbs of wanting (desire, hope, want, wish)が統語的(構文的)に相補分布するように——desireは補部としてNPを1つ、hopeはto VPおよび直接法の定形節、wantはNP + to VP、wishは仮定法の定形節——棲み分けをし合う方向で変化していることが、文献やコーパスの資料から裏付けられている。単独の動詞だけでは気付きにくい歴史的变化のダイナミズムが見えてくる。

保坂道雄『文法化する英語』(開拓社言語・文化選書)は、語彙的範疇であった語が意味の希薄化を伴って機能的範疇へと変化するという、英語の文法化を広範に扱ったもの。本書で紹介されているHopper and Traugott (2003)によると、(i)内容語>文法的語>接語>屈折接辞の方向へと文法化し、意味も(ii)命題的>主観的>対人的の方向へと変化する。指示詞から定冠詞theへ、場所の副詞から虚辞thereへ、並列名詞から補文標識thatへ、本動詞から迂言的助動詞doへ、本動詞から法助動詞へ、前置詞から不定詞のtoへ、などといった興味深い例がすっかりした形で紹介されている。どの時代に、何がきっかけになって、どのように構造変化したかといったことが、明示的に分かり易く示されている。文法化に伴う(ii)の意味変化の例として、本動詞が助動詞の根源的用法、認識的用法、拘束的用法へと文法化していく過程を挙げている。こうした文法化を、進化における外適用と並行的であると見なすなど、野心的な言語変化の研究である。

澤田治美『現代意味解釈講義』(開拓社)の「はじめに」には「意味の大海への船出」という副題が付いている。本書は全VII部、18章、500頁から成る、意味の諸相を広範に扱った、正しく「意味の大海」を示すに十分な大著である。大海に船出して、次々と荒波を乗り越えていく著者の舵さばきは見事である。意味の広範な諸相が無秩序に扱われているのではない。著者は意味を、同心円の内側から、命題の意味、モダリティの意味、発話場面的意味、社会・文化的意味の4層に分類する。この分類に従えば、第I部「意味解釈の変容性」、第II部の「構造と意味解釈」、第III部「時間と意味解釈」などは最も内側の命題の意味に、第V部「条件性・仮想性と意味解釈」、第VI部「モダリティと意味解釈」などはモダリティの意味に、そして第VII部「コンテキスト・情報構造と意味解釈」は発話場面的意味に、それぞれ当たる。同心円の最も外側

の社会・文化的意味については本書では扱われていないが、「あとがき」で『萬葉集釈注』の著者・伊藤博の詩歌の解釈に触れ、「意味解釈は、これほどまでに人間的に、豊かに、そして深くなるものか」と結んでいる。著者の今後の意味との関わり方を匂わせており、意味解釈研究の集大成を期待したい。

Ayako Omori, *Metaphor of Emotions in English: With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains* (ひつじ書房) は、メタファーは外界の知覚的経験を概念化する認知的過程であるという認知言語学の観点から、感情を表現するのに用いられる自然界および動物に関わるメタファーを多面的に研究した労作である。第2章では、“EMOTION IS NATURAL PHENOMENA” という概念メタファーを提案し、古典的な4元素(空気, 水, 火, 土)を用いた[nominal] of [nominal]型のメタファー(wave of emotion, outburst of feelingなど)をBNCから収集し統計処理している。自然現象の中でも水(特に、海水)に関するものが多く、Lakoffの提案する容器のメタファーを凌駕していることや、感情のプロトタイプであるANGERと伍してANXIETY, RELIEF, PLEASUREなどの例が多数あることなどを明らかにする。第3章では同じ手法で、感情としてPLEASURE, SADNESS, FEAR, HOPE, DESPAIRの5つを取り上げ、それらを表すメタファーとして前3者については水を用いたものが、後2者に関してはそれぞれ火と土を用いたものが多いことを明らかにする。第4章では手法を変えて、英語の成句や詩に現れる動物を用いたメタファーを収集して、動物や昆虫、鳥などがどのような感情と関係付けられているかを論じる。第5章では主にOEDなどの辞書を用いて動物が人間の性質や個性をどのように表しているか(例えば、猫は意地悪さや癡猛さ、犬は卑劣さや食欲)を明らかにする。第6章ではさらに手法とテーマを変えて、Miltonの*Paradise Lost*のテキストにおける変身のメタファーを取り上げる。第2, 3章はLakoff and Johnson (1980)の枠組みで、彼らやKövecsesが提唱する概念メタファーに修正を試みているが、その他の章は収集と統計処理に主たる関心が向けられている。データを丁寧に集め、議論を平明に展開している好書であるものの、やや考察に物足りなさを感じられる。

再び統語論へ戻る。遠藤喜雄『日本語カートグラフィー序説』(ひつじ書房)は、書名が「序説」となっているが、著者がジュネーブ大学へ提出した博士論文や海外出版の論文集で発表してきた論文における独自の成果を組み入れた、高度にして平明なカートグラフィー理論(地図理論)の普及書である。第1, 2章では、生成文法とその一理論である地図理論の概説および後者の独自性が述べられ、第3章以降では従来の生成文法ではあまり論じられてこなかった専門的なテーマが日本語から取り上げられる。同理論で提唱される階層地図の普遍性との関係で絶えず議論が展開されている。いくつかの例を挙げると、与格と対格の異なる語順の熟語の調査、それらの動詞由来複合名詞、詳細なアスペクト階層とUGの関係、2種類の主語階層と副詞の生起、トピッ

クの統語論，対比フォーカスの抑揚などは，特に興味深い．文の周辺の機能範疇の部分に焦点を当てることにより，やや閉塞感のある言語の記述研究に新境地を切り拓いている．今後の地図理論の発展のために，著者は，未解決の問題は未解決として読者への問題提起も忘れていない．否定の影響（作用域）が，英語では非対格動詞を除いて主語に及ばないが，日本語では動詞の種類に関わりなく主語にも及ぶなどという指摘は，今後の研究におもしろい影響を及ぼすものと期待される．

久野暁・高見健一『謎解きの英文法 使役』（くろしお出版）は，好評の謎解きシリーズの第7巻．シリーズの他巻と同様に，英語の教科書や英和辞典に記載されている英語の常識が間違っていることを次々と指摘し，正しい使い方を記述的に明らかにしていく．教科書は英語の初心者や学習者に「ほぼ正しい」概略を教えるという目的からして十全でないとしてもやむを得ないが，言葉の用法の鏡であるべき辞書にこんなに不完全な記述があったのかと驚かされる．例えば辞書に*The man made him dieのようなmake使役文は，動詞が「Oが自分の意志のできる動詞に限る」のでダメであると書かれているが，He made us shudderやEating meat makes us die soonerのような例では非意図的な動詞が用いられているにも拘らず適格であり，明らかに辞書の記述に反している．そのほか，make使役文のうち強制使役は受動化できるが自発使役は受動化できないとか，let使役は受動化できない，cause使役文は非意図的・無意識的な使役のみを表す，cause使役文は受動化できない，等々の辞書に記載されているような常識を，多くの用例を示して覆していく．他巻と同様に，今後の我が国の辞書作りに大いに好影響を与えるものと期待される．

形態論とも幾分関係するので，大名力『英語の文字・綴り・発音のしくみ』（研究社）にも触れておこう．本書の中心テーマは，文字の綴りと発音との関係であるが，その他文字に纏わるさまざまなテーマ（語の分綴，文字の種類や歴史的变化，とりわけアルファベットの歴史，正書法など）が，実に広範にしかも詳しく調べてある．昨今の理論的研究の観点からすると，「詳しい調査，丁寧な記述」という評価に留まるのかもしれないが，分綴の議論などでは，主要な辞書の実際を調べ，辞書によって異なる「規則」に基づく分かち書きが行われていることを明らかにし，こうした辞書ごとの規則性を見つけ出す作業に筆者の洞察力の深さと音韻論などの知識の豊かさが窺える．随所で，日本語の50音図やいろは，送り仮名，筆順などに触れ，興味を膨らせている．文字に関する概説書は多々あるが，本格的な調査・研究に基づく類書はあまりないようだ．綴りと発音の関係は英語教育全般や読み書きの指導にも資するところが大である．

次に論文集について．我が国の出版社から国内外の著名研究者の論文を載せた海外発信型の良書が刊行された．ひつじ書房から出版されたAnna Cardinaletti, Guglielmo Cinque, Yoshio Endo (ed.), *On Peripheries: Exploring Clause Initial and Clause*

Final Positions (ひつじ書房)である。地図理論の枠組みで、作用域・談話機能 (scope-discourse function) などを表す節頭と節末の構造を巡る論文を集めた1冊、編者の導入・概説、Luigi Rizziの特別寄稿2編、Rizziの還暦を祝う論文9編、Rizziによると、地図理論は、節構造の節頭部の機能範疇に作用域・談話解釈を付与しようとする理論であり、要素はそうした解釈を得るために(最終手段として)機能範疇へと移動して行く。1つの要素のチェーンは θ 役割に関する解釈と作用域・談話に関する解釈の両方を持つことになる。機能範疇は規準位置であり、規準を満たす要素(規準位置へ移動した要素)はその場で凍結する。単に移動した構成素は凍結するとするWexler and Culicover (1980)らの凍結原理よりも、作用域・談話機能を担う位置に移動してきたので凍結すると述べる規準凍結 (Criterial Freezing)の方が一歩理解が深まったような気になるが、ではなぜ規準位置にある構成素は凍結するのだろうかという疑問が依然として残る。編者、特別寄稿者以外の執筆者は次の通り、Alessandra Giorgi, Liliane Haegeman, Ur Shlonsky, Taisuke Nishigauchi, Mamoru Saito, Hiromi Sato, Virginia Hill, Bartosz Wiland, Marco Coniglio.

藤田耕司・福井直樹・遊佐典昭・池内正幸(編)『言語の設計・発達・進化——生物言語学探究』(開拓社)の編者の一人・藤田は、ノーム・チョムスキーが創始した生成文法が早くから言語能力を生物学的形質と見なしてきたにも拘らず、我が国の生成文法研究は今もって日本語や英語などの個別言語の研究に終始し「ガラパゴス化の危機に瀕して」といって危機感を深める。本書は、本邦で初となる本格的生物言語学研究プロジェクトの成果の一端をまとめたものであり、今後の生成文法研究への影響が期待される。第I部「言語の設計研究」、第II部「言語の発達研究」、第III部「言語の進化研究」、合計15編の論文から成る。論文の著者名は次の通り、藤田耕司, Cedric Boeckx and Antonio Benítez-Burraco, 福井直樹, 成田広樹・福井直樹, 辻子美保子, 加藤孝臣・久野正和・成田広樹・辻子美保子・福井直樹, 遊佐典昭, 杉崎鉦司, 小野創・小畑美貴・中谷健太郎, 池内正幸, 上田雅信, 保坂道雄。

澤田治美(編)『ひつじ意味論講座第3巻モダリティI——理論と方法』(ひつじ書房)は、モダリティとは何かというテーマを巡る論集。編者による、アリストテレス、スコラ哲学、我が国の時枝誠記、鈴木胤、認知言語学のLangackerなどのモダリティ観を概説した「序説」は有益である。執筆者は編者以外に、ハイコ・ナロック、飯田隆、堀江薫、仁田義雄、益岡隆志、安達太郎、近藤泰弘、高山善行、安藤貞雄、和佐敦子、阿部宏、宮下博幸。

『日本の英語教育の今、そして、これから』(開拓社)の編者・長谷川信子は、昨今の英語教育のコミュニケーション指向、小学校英語早期化の傾向は、葉や花を早くに与えて根をしっかりと育てることを軽んじていると警える。そうした状況下における変化や影響を、拙速に成功・失敗の観点から論じるのではなく、現実にとどのような変

統語論・意味論・形態論の研究

化が起こりつつあるかということ把握するべきであるという、重要な問題提起をする。第 I 部「学生の英語力とその特徴&背景」、第 II 部「コミュニケーション力の育成」、第 III 部「英語を使う」、第 IV 部「英語力を計る」、第 V 部「導入期の英語教育を考える」、全 20 編の論文から成る。執筆者は編者を除き、乗原和生、梅原大輔、田川憲二郎、白畑知彦、綾野誠紀、杉田めぐみ・朴シウォン、小林真記・小林恵美、伊藤泰子、上田由紀子・濱田陽、野村真理子、小野田榮、澁谷由紀、朴ジョンヨン、神崎正哉、松本マスマ、牧秀樹、町田なほみ、森山卓郎、永井典子。

最後に退職論文集を 2 点。江頭浩樹・北原久嗣・中澤和夫・野村忠央・大石正幸・西前明・鈴木泉子(編)『より良き代案を絶えず求めて』(開拓社)は、2015 年 3 月に青山学院大学を退職された外池滋生氏に捧げられた記念論文集、学界の定説に異論を唱え、絶えず独自の代案を求め続けてきた外池氏に相応しい書名である。執筆者は編者以外に次の通り。Josef Bayer, Hubert Haider, 今井邦彦, 金水敏, 久野暲, 中島平三, 西山佑司, 大塚祐子, Henk C. van Riemsdijk, Donald L. Smith, 山内一芳, 秋元実治, 阿部潤, 坂野収, 遠藤喜雄, 保阪靖人, 伊藤達也, 泉谷双蔵, 川島るり子, 木口寛久, 小泉政利, Eric McCready, 森川正博, 森田千草, 中栄欽一, 根本貴行, 野地美幸, 野村美由紀, 岡俊房, Peter Robinson, 佐野哲也, 瀬田幸人, 島田守, 高橋洋平, 高見健一, Christopher Tancredi, 豊島孝之, 塚田雅也, 上田功, 宇佐美文雄, 吉田正哉, 遊佐典昭。外池氏による「私の研究遍歴——君子豹変」と編者の野村による「外池先生との思い出」が巻末を飾る。

深田智・西田光一・田村敏広(編)『言語研究の視座』(開拓社)は、2015 年 3 月に静岡県立大学を定年退職された坪本篤朗氏に献呈された論文集。氏の温厚な人柄と研究の幅の広さを反映して、巻頭の中右実による特別寄稿、友人・知人による第 I 部「語彙と構文」、第 II 部「構文分析」、第 III 部「空所化, 省略, 削除」、第 IV 部「テンス・アスペクト」、第 V 部「文法化, (間)主観化」、第 VI 部「言葉と認知」と、多様な領域に及ぶ全 28 編。執筆者は編者以外に次の通り。中右実, 益岡隆志, 福安勝則, 堀内裕晃, 岩田彩志, 加藤雅啓, 大橋秀夫, 廣瀬幸生, 加賀信広, 大室剛志, 大竹芳夫, John Whitman, 木村宣美, 澤崎宏一, 関茂樹, 内田恵, 竹沢幸一, 和田尚明, 早瀬尚子, 今野弘章, 大村光弘, 本多啓, 武田修一, 寺尾康。巻末に坪本氏による「これからのために」。

今回は、生物言語学や地図理論などの新しい流れの論文集、重鎮の含蓄ある単著、そしてさまざまな論集における若手研究者の瑞々しい論考と、全体としてバランスのとれた刊行状況であったように思われる。書評の場が少なくなる一方で、自己評価や内部評価に刊行物の申告をする際に書評の有無を記載するという流れが出てきたよう

回顧と展望

だ。以前本欄で取り上げた著書の著者から、評価申告書に本欄書評を報告することができたという嬉しい連絡を戴いた。評価の時代であるからこそ、より多くの評者による、より多くの本についての書評ができるような場が設けられないだろうか。例えば、学会の会報紙誌を少し増補して書評欄を新設するなどといったことが考えられないだろうか。短めの書評でもよい。本は刊行することと共に、広く読まれ、広く批評されることによって、出版の質を高め、学問の水準を向上させるようになることは、改めて言うまでもない。

(学習院大学教授)